

三、元治元年甲子 天狗諸生合戦記 聞き書き

(一) 元治元年 天狗諸生合戦記

八月十二日、塩ヶ崎合戦より、天狗勢、祝町に引きあげ、磐舟山に居た。諸生方は、川上捨次郎、伊東辰之介等七、八人にて、大勢に押し寄せられては、とても叶わないと、舟に乗って湊に移ったが、川上捨次郎殿は只一人で、天狗勢の中に切り込み、二十人余りを切り伏せたが遂に討ち死にした。その後、那珂湊、祝町の両方から那珂川を中にして、大砲の打ち合いをしていたところ、十五日夜より十六日朝まで、大雨にて、川岸防禦の人々油断していたところに、天狗方、同日朝六つ（午前六時）頃に、小舟に乗り、小川に着船し、直ちに二、三ヶ所に火を放ち、煙の中より、五、六隻引き続き着船したと見るや否や、鉄砲打ち掛け乱入してきた。諸生方は、二、三十人で、余りの者は人足獵師の者どもにて、大勢休んでいたが、俄かの出来事であったので、諸生方も大いに打ち負けとなり、御城下まで引き上げた。打ち死にの人数は、諸生方一人の外に、獵師百姓あわせて三、四十人ほどになり、天狗方も三十人ほど即死した。何れにしても、この日の合戦は、天狗方大勝利であった。

湊を乗っ取られ、威勢はなはだよくなかった。

右那珂川を渡られては、定めし、太田に参ることもはかり知れないと、太田の人々は驚き、大騒動となった。十六日夕方より十九日の頃まで、毎日毎日、在方へ身内親類は申すに及ばず、常々心安きものを頼り、馬に荷物を積み避難した。店の売物までも在方に送ったので、渡世（商売）を休んでいた。近頃には珍しい事であった。

この事によって、水戸御城下にお住いの、御殿守、佐治七左衛門殿、太田御殿御固めを仰せつかり、大将となり、諸生方、獵師五百人にて守った。なお、山下の防禦は、相葉九十郎殿、山本五平殿が、両人大将となり、毎日毎夜、百人位ずつ、かがり火を焚いて、夜番をしていた。

八月十二日出 二十二日回文

書き付けを以て 触れ申す

京師乱妨の後、松平大膳大夫（松平頼徳）家来、何れかに潜伏しているかもわからないので、皆銘々の領内等を篤く探索するよう、先達って（先日）、通知した通りの事を、よく心に入れ、屋敷中のみならず、市中等においても、この上とも残党ども潜伏しているかも知れないので、いっそう嚴重に調べ、怪しき者があったなら、早々捕り押える様に、万が一にも屋敷内等に隠し置き、それを他方より知らした者には、特別に御應美の品々を下されるとの事、お触れの事について、心得違いをいたさぬ様に

右の次第を 触れまわす

八月十九日

児玉園右衛門

二十二日四つ半(午前十一時)時分、天狗勢、枝川村と青柳村の境の橋際まで押し寄せ、御杉山へ大砲を打ち掛けたところに、諸生方、青柳村へ渡り、橋を隔てて、鉄砲を打ち合い、天狗方大いに打ち負けて、津田村明神の社に引きあげ、田彦村、市毛村の辺に陣取りしたので、諸生方は常磐村まで引きあげた。

二十二日夜中より、二十三日七つ(午前四時)頃まで、引きもきらず、大砲の打ち合いをした。

同二十二日夜、石神内宿泉福寺ならびに黒沢宅に天狗勢五十人程も集り、その上、右村は以前より天狗同腹でかくまい置くとの事、近村の村より早馬にての急報があった。太田御殿御固めの諸生方三人、外に獵師五十人に、大砲を打ち掛けたらびに、右注進の村々よりの加勢五十人宛出発した。

二十三日朝、六つ時(午前六時)、米崎村へ渡舟し、直ちに、右村神主宅(海後氏)へ放火し、それより石神内宿村に押し寄せ。黒沢覚衛門、同寛介、同弟覚蔵、寺門祐七、同平介等を初め、天狗勢一味の家宅残らず火を放し、即時鉄砲を打ち掛け、大砲を打ち合い、それより

合戦となり、打取り首走つ、召し挿い人五人、手負い人数多し。諸生方には、額田村加勢の内、即死害人、手負い人害人、外に怪我人なし。

同二十三日朝、平磯村辺に集っていた天狗式百人程、豊岡村へ留まり、二十四日朝、石神外宿村へきた。渡し場にて、土木内村の百姓と鉄砲を打ち合った。大軍のこと故、百姓方は打ち負けてしまった。早馬にて、度々、太田御殿に注進があったので、諸生方相葉九十郎殿、山本半平殿、大将にて、獵師五十人、外に太田詰め諸生組、御加勢として、都合百人ばかり、二手に分かれ、土木内村に押し寄せた。天狗勢は、下土木内村に火を掛け、それより神田村へと通行のところへ、諸生方にては鉄砲を打ち掛け、並木の中で大合戦となった。諸生方にては、大砲を打ち、天狗方に分取られた。又、田中内村にては、天狗打ち負け、乗馬式四、笠、外に着物類などを諸生方分取った。戦の様子は、何れとも勝ち負なしの有様であった。分取った着類は、嶋村孝之介の品であった。

城下にては、二十二日より、天狗打ち合いたことは、前に記した通りで、二十三日夕七つ(午後四時)時より、下町新町の合戦になり、天狗方、大将立原朴次郎、諸生方横山九郎衛門殿と打ち合い、終に立原の首を打ち取る。又同日、青柳村にては、武田彦衛門の首を打ち取る。

この日の合戦は、諸生方七分の勝ちであった。打ち取った首、名の知れ渡っている者拾五人で、外に手負いの者多数あった。諸生方にも、即死の兵三人、外に手負い人は五人であった。

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

二十四日夜、大橋宿で、小生瀬村の獵師、天狗方の首を取り、その夜は山に隠れ居り、翌日二十五日朝、敵方の乗馬を引きあげ、右馬に乗り、首を持参した。百姓としては、立派なことと、皆賞めそやした。

同日、五つ半(午前九時)頃、又々首を売つ持参した。これは、大沼村より持ってきた。二十四日の戦で、手負になった者共、山中に逃げ入り、その辺の人に見付けられ、打たれたように見受けられた。

二十七日、またまた、大沼海防御陣屋より注進があったので、相葉九十郎、寺門登市郎殿、手勢式百人に、大筒、玉葉などを太田より持ち出しになり、その夜は相葉九十郎殿は、大橋の寺に御旅宿になった。

翌二十八日、またまた注進があり、助川村より天狗勢多数繰り出したのことに付き、金沢村まで進み出で、大久保村十石堀の境にて大合戦となった。諸生方、大勝利。天狗の首を三つ取り、外に鉄砲にて打ち倒した者二十人程、これは、先方にて死人を引き取ったので、首は取っていない。諸生方にも、即死者人あり、これは金井下の住居の金兵衛と申す者で、外に式人、鉄砲疵を受けたが、生命に障わりなし。

翌二十九日、金沢村、下孫村より首三つ持参してきた。これは、昨日の合戦にて打たれ、田畑に倒れていた者の首であった。

右、二十八日の合戦の番首は、内堀町の海老屋の倅與兵衛殿、式番首は、寺門登市郎殿。

外に、大将相葉殿を目がけて鎗を向けた者は、助川家中の者で名の知れた人であったという。相葉殿には、旗本四、五人付いていたので、一打ちに切り捨てた。これは、露善の倅伴助殿、大手柄であった。

この日の合戦は、味方十二分の大勝利である。その節、内尾彦七殿も出陣し、たいそうな働きであった。

八月三十日、相葉九十郎殿、所々に高札を立て、左の通り記した。

一 近来浮浪の輩、徒党を結び、所々を横行し、恐れ多くも、烈公様の徳義を汚し申す。容易ならざる御国難を作り起してきた事は、人々承知の事ではあるが、物の黒白もわからず、ひとすじに国家の為と教えこまれ、誤って賊徒の奸計に欺むかれ、父母の名を辱かしめしものもあり、今や、大軍を以て、賊徒を掃攘する時がきた。もし、過を悔い、罪を改むるものあらば、速に志をひるがえし、太田陣営に出頭し、降参すべし。然らば、陣将、寛大の慈しみの心を以て、その罪を許すものである。

右の文の作者は、中利員村の生田目氏である。

御城下にては、天狗方、追々、所々より集りきて、湊、平磯村、枝川村、五丁矢場、細谷御

蔵等に陣を取り、御城を乗っ取る了簡(考え)であったが、諸生方の勢が強かったので、日夜大砲の打ち合いばかりしていた。

八月二十七日、御公辺より、御加勢の軍が繰り出しになった。二十八日の繰り出しには、一の先は下町本町通りより新町まで出て、陣を取り、歩兵組は御杉山より繰り出し、河岸通りに陣を取り、二の先の勢は青柳村より枝川村まで繰り出し、二本松勢は中河内村より繰り出し、木の倉村、中台村、津田村、市毛村まで山追いし、それより枝川村に陣を取り、四方より大砲を打ち寄せたので、神勢館並に御蔵に陣取っていた天狗勢は、大いに驚いて、二十八日、残らず湊に引きあげた。

御加勢の御大名方 覚え

公儀 歩兵 三平組 八月二十三日御城下へ御着 総勢二千二百人程

田沼玄藩頭様 九月朔日御着

奥州二本松

丹羽右京大夫様 八月二十七日御着 総勢 千人程

壬生⁴²

鳥井丹波守様 八月晦日御着 総勢 八百人程

九月一日、丹羽右京大夫様勢、千人余り、太田御着。外に、御城下より、諸生方御案内として、御先手五十人、大筒式挺、後より北郡方児玉園御門様、その外惣勢五十人程、残らず太田へ御旅宿になる。浄光寺御本陣、脇本陣法然寺、その余りは、太田西、東町に宿をとり、その節、私宅にも少々御泊りになった。御名前前は、東御郡方御手先三人、お供式人、上下あわせて五人であった。右お泊りの惣勢は、翌二日も、引き続き、お泊りになった。

二本松勢のご様子を、詳しく記すと、左の通りである。

丹羽右京大夫殿の当水国までの御通路の順序は、奥州二本松出立は、八月十七日。それより奥州路を通り、宇都宮より水戸御城下繰り込みは、八月二十七日であった。一日の行程は、五里位宛であった。それは、伝馬人足及び兵糧、薪、明松、器物は、鍋、釜、飯台の類までも、御国元より御持参の上、御加勢に御出でになられたので、本当にありがたい事であると、世間の人たちは申していた。

二夜御泊りで、三日目朝六つ時(午前六時)、一の先、二の先、二備なえ御出陣になった。

先手の大將は、大谷淡路殿で、二番手の大將は、大谷与兵衛殿で、都合七百人にて押し寄せた。惣大將日野源太左衛門殿は、手勢二百人程にて、浄光寺本陣に残り、太田の防禦をしていた。

二本松勢は、東通りにて、石名坂中食。諸生方先手は、真弓山新道から押し寄せた。相葉九十郎殿は、入四間道より、太田戦士の者を引き連れ、助川城の裏道に押し寄せた。二本松勢の一手は、下孫村まで出陣し、一手は、久慈舟渡より下土木内村まで、川岸三ヶ所の防禦をしてい

た。

九月四日夕方、天狗勢百人程、石神明神の森まで出てきたので、土木内村の陣所より、大筒二発打ち掛けたところ、その場を逃げ去り、米崎村に参り、翌五日四つ（午前十時）時分より、米崎村の民家に放火いたし、それより額田村に押し寄せ、所々に火を付け、それより河合舟渡まで来た。太田浄光寺に御泊りの大将、日野源左衛門殿、手勢二百人程にて、河合舟渡まで押し寄せ、川をへだてて、鉄砲を打ち合い、天狗五人打ち落したので、天狗は額田村に引きあげた。丹羽勢は、勝鬨をあげ、舟渡防備の人数を残し、大将は太田本陣に引きあげた。その夜はまたまた、町人たち荷物などを片付け、今にも焼かれるものと思い、恐怖していた。

翌六日、九つ（午後〇時）時にいたり、油繩子村に陣取りしていた丹羽勢の一備、太田へ御帰りになった。また、小菅村森久保に御旅宿していた相葉九十郎殿の手勢式百人程ならびに太田戦士の者、皆々帰宅いたした。御人数は多数になったので、六日七つ（午後四時）時分より、町中の人々もようやく安心した。

同六日、御城下より、額田村へ押し寄せた御人数には、鳥井丹波守様の手勢八百人程、菅谷村不動院に御旅宿になり、諸生方、朝比奈弥太郎殿、門部村黒森に陣取りし、寛助大夫殿、一の先にて、手勢式百人程にて、七日早朝、南酒出村より額田村藤山へ押し寄せ、天狗勢と大砲を打ち合っていたところ、茶畑の中より伏兵あらわれ、攻撃されたので、寛方敗けいくさとなり、散り散りとなった。大将、寛殿、大いに腹を立て、賊兵何ごとやあらんと、白身の鎧を

引っ提げ、大勢の中に飛び入り、六人まで突き伏せた。天狗方、みな恐れをなし、藤山の上に逃げのぼった。その場にて、大筒壹挺、天狗方に分取られ、即死壹人、手負い人貳人出た。それによって、寛助大夫殿、南酒出村まで引きあげた。

同六日夕、七つ（午後四時）過ぎの頃、菅谷村に御旅宿中の鳥井勢、向山村に押し寄せ、天狗共百五十人程集まっているところに急に大砲を打ち掛け、四方より押し入り、天狗共五十人程打ち伏せ、残り者共は額田村へ逃げ上った。向山を占領し、それより吹上坂に押し寄せた。坂下にて、大砲を打ち合っていたところ、鱗勝院の西方より、天狗勢進出の様子を、鳥井勢早くも見付け、やぶかげに隠れ居り、横合より四、五十人にて鉄砲を打ち掛け、天狗勢三十人程その場に打ち伏す。鳥井勢大勝利なり。

八日は大雨降り、鉄砲の打ち合いばかりしていた。またまた、東河内村よりの注進があり。助川より、天狗勢五十人程、山越して、上溯坂の上辺へ乱防しているとの事にて、追々人足共を出動させたが、天狗勢百五十人程にもなり、所々の金持の家へ押し込み、乱暴しているとの事、度々の注進があったので、相葉九十郎殿、戦士を引き連れ、八日夜、里野宮村泊りにて出陣した。

同九日、竹瓦村へ、天狗共、小ざらし舟に乗り、同村明神の森に現われたとの報らせが、右村の百姓からあったので、土木内村防禦の陣より、上下二十七人にて、竹瓦村へ進んだところ、土地不案内の丹羽勢、何所とも知らず、久慈川岸にきたところ、竹瓦明神の森より鉄砲を打ち

掛けられ、思いもよらぬ不意打ちに、四五人打たれ死す。それより、打ち合いとなり、双方ともに怪我人が出た。二本松勢、小勢にて打ち負けとなり、土木内村へ逃げ帰った。後より、天狗共追いつきにきたので、またまた川土手にて打ち合いとなり、段々丹羽勢は引きさがってきた。

二本松の一手は、久慈浜を防禦していたが、急報により、大谷淡路殿は、竹瓦村まで駆け付けたが、味方も後退し、敵も神田村より田中内村へ逃げ出したので、早速引き返し、石名坂の上陣を張っていたところ、天狗勢さらさら露知らず、坂の中段まで登ってきたところに、大筒式挺、打ち掛けた。賊共四、五十人一度に打たれ死んだ。それより、坂下に陣を取り、打ち合いになった。天狗共は土地馴れた者なので、赤羽通り、さらに南高野村清水通り、三方より現われたので、丹羽勢も大いに驚き、坂下の敵中へ切り入り、一方を打ち破り、大橋村へ残らず引きあげた。天狗の打ち死にした者百人余り、二本松勢も打ち死に拾人程出た。

この日の合戦は、これまでにない一番の激戦であった。

右の天狗の者共は、九日朝、額田村を引き払い、助川に帰るつもりにて、竹瓦村へきた様子であった。土木内村、竹瓦村辺の百姓は、残らず天狗組であるので、小舟を出し、渡したとの事である。賊徒どもに内通した者は、誠にあきれかえった者どもである。その夜、八つ（午前二時）時分までに、丹羽勢は太田本陣に、残らず引きあげた。

翌十日朝、嶋村金剛院へ、天狗共七人参ったとの報があったので、太田諸生方打ち取りに行

く途中、稲木村⁷⁰で知らせの者に出会った。稲木村を初め、松栄村⁷¹、藤田村⁷²、中野村⁷³、四ヶ村の百姓、右金剛院に押し寄せたところ、七人のうち四人は刀を抜いて切って掛るを、竹鎗又は本鎗にて、右四人を打ち伏せ、残る三人を召し捕え、太田本陣に連れてきた。

昨九日夕、大橋村より丹羽勢帰陣の節、十二丁田甫にて、曲者三人を見付け、刀を取りあげ、太田本陣に連れ帰る途中、江ぶき橋の間にて、二人切腹してしまつた。

老人は、高橋住之介という者で、南郡方の手代であった。この者は、金子五拾両持っていた。他の老人は、二拾両両式分持っていた。身仕度は、白羽二重の陣羽織などを着用しており、身もずいぶん宜ろしい者と見受けられた。残りの老人を嚴重に取り調べたところ、老々白状した。

同日、稲木村の山に隠れて居た者があった。太田諸生方見廻りの時、直ちにその場に駆け付け、鎗付っ掛りした老人の鎗を取り押さえ、他老人鉄砲を打ち掛けたのを身をかわし、右鉄砲を取り替えていたところ、又老人鎗を突っ掛け、胸板を突っ通し、よろめく所に付け入り、首を打ちおとした。右の賊徒共は、余程の手利きと見られ、二、三人位では中々打ち取ることの出来兼ねる剛の者であった。

又、相葉九十郎殿、八日里野宮泊りで、小里⁷⁶方面に押し寄せようとしたところ、中染村⁷⁷の寺へ賊共宿泊したとの知らせがあった。翌九日朝早く、右寺へ押し寄せたところ、朝飯のところ、に打ち入ったので、賊共大騒ぎとなり、逃げ出さんとした。四方より切り込み、取り首拾式、

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

召し捕え人八人となった。翌十日、太田本陣へ首を俵詰めにして、馬で送った。右中染の残党共は、松栄村、嶋村、小嶋村、藤田村、中野村辺で、打ち取り、召し捕らえ人十七人。中染村より、藤田村までの分あわせて、三十七人となった。

又、九日の朝、額田村引きあげの天狗共、戸田采女頭殿、田彦村に御宿泊のところに、不意に打ち寄せ、昼飯の場所に切り立てられ、大騒動となり、それより切り合いとなり、戸田方にて即死十一人、手負い四人あり、百姓勢三人、合わせて十八人の怪我であった。賊徒共の打ち死に、手負い三十人程になり、大層な戦であったという。

同十一日、利員村、大門村辺より、召し捕え人、十一人が送られてきた。

同日、壬生城主、鳥井丹波守様、御人数上下七百人、太田東町御通行にて、塩横町より檀林(久昌寺)へ御本陣と定めた。もっとも、大筒掛りは細道通行不能に付き、西の上、矢嶋屋が旅宿となった。右行列は、三万石の大名には、不相應の出立ちと、町中の人々皆賞めそやした。又、額田村、寺門登市郎殿は、九月三日、太田より出陣し、助川城の裏山より宮田村へ越え、同八日、山野辺公の城を乗っ取った。それは、主水正殿(山野辺)、同若君、兩人、外に中臣の面々十人余り付き添い、太田陣宮、二本松様に降参してきた。その余の家中の悪人共は、天狗共を引き入れ、三百人余り城中に籠居していたのを攻め落し、宝物類は文庫蔵に入れ、御殿へ火をかけ、家所は勿論のこと、その他残らずを焼き払って、十一日の夕方、太田まで帰陣し、十二日、額田へ登市郎、手勢三十人程にて、鎧を着用出発した。その出立ちは、御家中の方に

も勝る有様であると、皆の者賞嘆した。

十三日より、磯崎村、湊村、祝町へ、市川様、先陣にて大勢にて押し寄せ、歩兵方、鯉淵勢二組は大貫村より大砲を打ち掛け、二十二日までに、磯の浜村の後の方より祝町までも乗っ取る。又、鳥井丹波守様、市川三左衛門様の式手は、中根村に陣取り、湊原まで攻め込み、日々鉄砲の打ち合いは所々にあったが、格別の戦いもなかった。

ところが、二十五日、平磯原にて、市川様の勢と天狗勢と大戦いをした。市川方は、計略を以て、大敗したように見せ掛け、五、六丁ばかり原中に引き退がったところ、天狗勢勝鬨をあびて、追い打ちをかけてきたところへ、横合より壬生勢三百人程押し出し、鳥井勢と市川勢両方よりはさみ打ちにし、天狗勢大いに打ち負け、その場にて百人余り打ち死にした。平磯村、前渡村、磯前村の三ヶ所に火を掛けたので、天狗共居所もなくなり、残り者共残らず湊村へ逃げ帰った。

同二十七日、松平大炊頭殿、わずかの手勢三十五人にて、江戸街道小幡宿まで参ったところ、松平周防守殿御固めにて取り押えられ、その人数、外七十五人、計百十人召し捕らわれ、御目代田沼玄蕃頭殿のところ指し出しになられ、荷物など多数、御評定所に持ち込まれたとの由である。

又、助川にても、二十六日の合戦に、田中源藏、賊徒の大將にて、総勢二百人余り、助川村、會瀬村、河原子村辺、所々に乱暴していたので、二十四日夕方より、諸生方、太田陣所より出

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

陣になり、二十五日朝、丹羽勢も出陣した。その夜、下孫村へ宿取りしていたところ、夜半過ぎの頃、俄に鉄砲を打ちかけられ、又々、下孫宿に火を付けられたので、丹羽勢大いに驚き、天狗共の夜打ちと仕度をいたせと、一の備えの陣将、大谷鳴海殿、大音声で掛けたので皆々用意をし、それより天狗共を追い出した。二十六日朝、成沢宿まで追いかけた。

相葉九十郎殿、手勢二百人余りにて、入四間村より助川城裏山へ押し寄せ、二十六日九つ（正午）山上より大砲を打ち掛け、天狗三人を打ち倒した。賊共、大いに驚いて、城内に逃げ入ったところ、成沢村口より、丹羽勢鉄砲を打ち掛け、押し上った。

大手口よりは、寺門勢押し上り、三方より攻めたので、大将、田中源蔵をはじめ、二百人余り搦手口より逃げ出し、山伝いに何れの方角かに逃げ去った。その夜は、かまわず休息し、翌二十七日、東河内村へ山道伝いに行くと、各村より知らせがあり、またまた、太田から諸生方出陣し、丹羽勢は二十六日九つ（午前〇時）時分、太田へ帰陣した。すぐさま、控の人たちはその夜のうちに町屋村まで出陣した。それより、天狗共は、小菅村まで逃げたところ、小菅村の百姓の者たち、隣村の者たちと、大勢にて取りかこみ、鉄砲を打ち掛けた。賊共は数日の戦で大いに疲れ果ててると見え、四、五人打ち落したが、抵抗もせず、東金砂山へ逃げ上った。それを、相葉九十郎、深追いしたので、敵は具足五人前、馬三匹、外に兵糧の類までも置き去りにして逃げて行った。敵は、西金砂山に上り、西金砂山より頃藤村に、鳥の子山に行き、金沢村というところに、都合百人余りにて泊り、百姓家七軒の家に宿を頼み、風呂などに入り、

夕飯を食べ初めたところに、諸生方押し寄せ、俄に鉄砲を打ち掛けた。賊共、大いに驚き、取るものも取りあえず、矢見曾（八溝）山の方に逃げて行った。それより、相葉九十郎殿一手、又白石要介殿一手、右二手にて、何国までもと、追いつめた。

同月二十九日、寺門登市郎殿、手勢武百人余り、引き連れ、坂上村より馬場村まで引き返してきた。登市郎殿は、騎馬に打ち乗り、白旗二本押し立て、その勢力は飛ぶ鳥も落とすほどの勇ましきであると、町人、その勇気を賞めたたえぬものはなかった。馬場村大津弥兵衛殿に泊り、手勢の者共はそれぞれ隣家に泊した。

翌三十日、下孫村百姓、葛屋佐重郎の弟、十二才になる者、寺門の陣に参り、願いの筋ありと、有縁の者付き添いにて、大津邸に参上し、登市郎殿、面談したところ、下孫村葛屋佐重郎は、賊共に手に掛り打ち死にした。右敵の者は、一昨日入四間村にて召し捕えられ、太田牢屋に入れられているとの風聞あり、何とぞ敵討ちしたしと、十二才の少年の願い出である。寺門殿、これを聞き、誠に天晴な少年であると感服し、早速、祐筆役内藤弥太郎殿に願い出になり、右罪人二人を牢屋より引き出し、稲木村境の川岸にて、見事討ち取り、本懐をとげた。前代未聞の天晴れる子供なりと、賞めたたえた。

右 敵打ちの次第を 次に記す。

常州多賀郡下孫駅

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

百姓 葛屋佐重郎
 弟 年 十二才
 外に 付き添いの者 二人
 但し、有縁のある者であると

助大刀

額田村 寺門登市郎

小生瀬村 佐川源次郎

討当り人

助川家中

高村 善次郎

大橋村 百姓

紺屋 貞藏

右両人共 子九月晦日夕七つ時ニ討打候

相葉九十郎殿は、田中勢を追い行き、八溝山に戦ったが、天狗勢、黒羽村の方に逃げ出したので、それを追い詰め、伊王野村という宿場に来た。ここは、幕府直轄領で、山内源七郎殿の支配地である。二口宿にて、二十人余りを召し捕え、それより白河領分の畑宿村というところ

まで追いつめ、残らず打ち取ったが、二十人余りは逃げ失せた。頃藤村より畑宿までに、打ち取り、召し捕え人数は、凡そ百五十人余りであった。その者の中に、尾州(名古屋)藩の家中で、二十四才にて、格別人品もよろしく、千四百石取りの倅と申す者もいた。その者を初め、八溝山にて召し捕え人四人を引き連れ、十月六日夜、相葉様、太田まで帰陣になった。九十郎殿の働き、他国までも出でて、天狗共を打ち取ったのは、その戦い振りは、えもいわれぬ者と、皆評判していた。

天狗共は、北浜¹⁰¹、助川御館より、久慈浜、村松村までの残党は、残らず十月初めまでに打ち取ったが、湊、館山御殿、反射炉を初め、町中に集っている人数は、凡そ三千人余りの由である。

前に記して置いた通り、九月二十五日、御大名、御旗本衆、総掛りで、関戸舞の山辺まで乗っ取り、合戦となった。平磯村辺までも、諸生方乗っ取り、その後、十月五日、またまた総掛りで合戦となり、柳沢村より関戸舞の山まで乗っ取り、大砲三十、百目筒拾六丁、その外分取り物数多くあり。その後十日、またまた、総掛りの約束にて、九日夜より翌朝を待っていたところ、天狗勢も、九日夜より馬渡村の本松まで参り、又一手は前浜の方より馬渡村へ押し出してきた。十日明七つ半(午前五時)頃、右村へ火をかけ、湊原に押し出したので、鯉淵勢を先陣に進み、合戦していた。ところが、右天狗共の後より切り立てられたので、鯉淵勢多く出、逃げ出した。それより、宇都宮勢、鯉淵勢と入れ替わり、合戦となったが、またまた

敗北してしまった。それより、市川様乗り出し、その後、鳥井丹波守様、板倉内膳正様、替わ
るがわりに合戦したが、終に天狗勢に追いまくられてしまった。二日の戦で、味方五十人余り
の怪我人が出た。

九月初めより十月十四日過まで、二本松勢、太田の固めをしていたところ、中根合戦を公辺御
目代様より申しつかり、十五日早朝、二本松御家老日野源太左衛門殿、浄光寺本陣を出立にな
る。そうはいうものの、一の前大谷鳴海殿は十月二日より村松村固めを、また二の前大谷與兵
衛殿は石神固めをしていた。十五日、三備えとも残らず中根村に出陣した。

太田固めの交代は、御旗本織田伊賀守様、井上越中守様、二頭ふたびつで、総勢千五百人。十四日八
つ時(午後二時)、太田へ繰り込みになられた。その節、私宅へも大砲方の下役十五人お泊り
になった。同十七日、水戸一の先の御備えも太田へ繰り込みになった。総勢三百五十人余り。
総大将、寛助太夫様であったが、寛様は中根合戦にて少々怪我をなされたので、御名代として
尾崎様がお出でになった。

九月十五日、二の先御備え、太田固めをしていたところ、右一の先と入れ替わりになった。
十日十五日、鶴殿平七殿、総大将にて、総勢三百四十人余り、残らず中根村へ出陣した。

御加勢の御大名、御旗本、諸生方は、十日合戦に打ち負けたので、日々協議を重ねていたが、
別段良い計略もなく、日々を過していた。丹羽勢の総大将日野源太左衛門殿、十五日夜五つ(午
後八時)頃、馬渡村より中根村の陣所に参る道、天狗勢三、四十人余り、横合より鉄砲を打ち

出した。二本松方の軍師、小川原介殿、御家老より先に乗り込み、早くも手配をしておいた。

天狗共を計略の事にて、横切りに出たところ、却って、丹羽方の伏兵おこり、天狗共を裏表よ
り切り立てた。天狗共、打ち負けとなり、二十人余り即死した。

翌十六日、鉄砲の打ち合い、十七日、合戦となる。歩兵方と丹羽勢、中根村より湊原へ押し
出し、天狗方と切り合いとなった。両方共怪我人多数出来、大合戦となった。天狗方は、湊よ
り追々繰り出し、十七日朝より八つ(午後二時)過ぎ頃までの戦であった。湊へ、舟中より火
矢を打ち込み、御舟蔵を焼き、また平磯口よりも火をかけ、和田町を焼き、反射炉へも火をか
け、都合三ヶ所より煙上り、諸生方勝ち戦であった。

翌十八日、また、合戦となり、湊原まで押し寄す。天狗勢□人余り、原中に出張で張っていたと
ころに、俄に打ち込んだので、三十人余り打ち取り、残り者共は湊に逃げ込んだ。十五日夜よ
り十八日までの戦いは、味方大勝利であった。

その後、二十三日夜より、賊共、雲雀塚ひばりづかまで三百人余り押し出し、翌日の合戦を馬渡原またたに行
うつもりと見え、前日に繰り出したところに、二十三日朝七つ(午前四時)頃、祝町を固
めていた堀田様、鯉淵勢、寺門勢、舟に一時に乗り込み、すぐ様六ヶ所に放火いたし、攻め戦
った。時に、館山に籠っていた者共二百人余り逃げ出し、その餘の残党二百十三人を召し捕え
にいたし、奥行十二間の御穀蔵に、縄付きのまま拘禁したとのことである。召し捕え人のうち、
大将分、榊原新左衛門、福地政次郎、高林、宮内などの勇士もいたとのことである。

これによって、湊の一戦は、勝ち敗けなしの平均になった。

そうこうしているうち、雲雀塚へ繰り出した賊共、湊へ放火いたしたので、周章狼狽し、逃げ仕度をし、隠れて居るところへ、館山の落武者共逃げてきたので、たちまち一軍団となり、馬渡村へ放火し、それより高野村、足崎村を通り、横堀村より杉村を通り、瓜連村へ到着。それより、大宮村へと進んだ。同所を防禦していたもの、大砲二、三発打ち合ったが、如何にも賊共大軍故、防ぎ兼ね、防禦の者共残らず逃げ去った。賊共、大宮村へ繰り込み、夕飯を食したのは、五つ(午後八時)頃の事であったという。

さて、明日、大宮村を出立の時、二、三軒に火を放ち、それより、野上村、山方村にも放火し、保内郷の方に逃げて行ったとの事である。

二十四日、水戸御目代、御陣將、市川三左衛門様の一手八百余人、白毛の鎧を立て、太田御殿に繰り込みになった。右御供の面々には、剛勇の間こえある伊東辰之助殿などを初め、諸生方、手に手に鎧を持ち、供奉の有り様、さながら御大将の馬上の御振舞、見る人、世直し様と唱え、涙を流し、伏し拝した。続いて、二の先御備え、鶴殿平七殿を大将として、四百人余り繰り込みになった。東町下の法然寺へ本陣を構え、大口番二組御泊りにて、その余は所々へ町宿となった。その折、私方へも、御目附頭願、小川喜左衛門殿、その外御徒目附二人、押役二人、御供二人、御厨別当一人、合わせて十一人の宿をした。御繰り込みは、五つ半(午後九時)過ぎ頃、宿着は四つ半(午後十一時)過ぎとなり、それより夕飯を食べたので、漸く八つ(午

前二時)過ぎの頃になられた。御泊りの旦那方は、随分と難儀をしたことであろう。折りから、保内郷大子村へ、賊共多数繰り込みとの知らせが参ったので、明朝繰り出しの予定となり、二十六日朝、五つ半(午前九時)過ぎ、御陣將、市川様、天下野村まで繰り出しになられた。同時に、先の二の備えの一手も、また天下野村へ繰り出しになられた。

翌二十七日、溝口勢、二千五百人余り繰り入れになられ、太田村には、丹羽勢一手、水戸一の先一手御泊りになつて居るので、町中残らず五、六人宛町宿を割当になった。溝口勢は、檀林御本陣にて、山の御寺、蓮花寺までもお泊りになられた。

右、新発田勢(溝口勢)の行列は、これまでの御大名、御旗本、所々よりお出でになられたが、この新発田勢ほどの立派な御仕度はなかった。見物の人々は皆驚いた。

一夜お泊りにて、翌二十八日、天下野村まで御出陣になられた。

又、市川三左衛門殿は、天下野村より生瀬村まで出陣になられた。伊東辰之助殿は、手勢八十人に伊東勢と名付け、一手にて、月折り峠(月居峠)まで押し寄せた。右山上に、賊共百五人ばかり見張り所を固めていた。伊東勢は、直ちに大砲を打ち掛けたので、賊共打ち負け、召し捕え人八人、打ち取り首奪つ、残り者共残らず大子村へ逃げ去った。月折り峠より袋田村まで、諸生方退々押し掛けた。

又、湊にては、二十三日、降参願いをしたものの五百人余り、その外子供、女中まで合わせて八百余人降参と申し立てられたので、中々大人数となったので、手も付けようもない有様であ

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

- | | | | |
|----|---------------------|----|----------------------|
| 17 | 平磯村 (那珂湊市 旧平磯町) | 18 | 豊岡村 (東海村 旧村松村) |
| 15 | 米崎村 (那珂町 旧神崎村) | 16 | 額田村 (那珂町 旧額田村) |
| 13 | 常磐村 (水戸市 旧常磐村) | 14 | 石神宿 (東海村 旧石神村) |
| 11 | 田彦村 (勝田市 旧佐野村) | 12 | 市毛村 (勝田市 旧川田村) |
| 9 | 御杉山 (水戸市 旧水戸城北の川岸) | 10 | 津田村 (勝田市 旧川田村) |
| 7 | 枝川村 (勝田市 旧川田村) | 8 | 青柳村 (水戸市 旧柳河村 枝川の上流) |
| 5 | 太田村 (常陸太田市 旧太田町) | 6 | 太田御殿 (常陸太田市 旧太田町) |
| 3 | 岩舟山 (大洗町 旧磯浜町 祝町上流) | 4 | 湊 (那珂湊市 旧那珂湊町) |
| 1 | 塩ヶ崎村 (常陸村 旧下大野村) | 2 | 祝町 (大洗町 旧磯浜町 那珂川右岸) |

(注)

市川三左衛門様は、六日、瓜連村泊りにて、御城下へ御帰りになつたところ、またまた、賊共、茂木村¹²³辺に居るとの知らせがあつたので、七日、大宮村まで引き返しになつた。
また、丹羽勢の面々は、さきの中根合戦の時より太田固めをしていたが、八日、九日、十日の三日の間に、一の先より、二の先、三の先と御出立になられた。これも、すぐ様国元へ御帰りでなく、まず白河¹²⁴に参り、それより、芦野、白坂辺の賊徒共の居るところに出張することであつた。

つた。

二十七日、またまた、歩兵方残らず、その外、諸大名方大人数にて湊に繰り出しになり、幕府御目代、田沼様も御乗り出しになり、右の者共を残らず、塩ヶ崎の寺に、二十九日まで引き取りになつた。

十一月一日、ようやく湊村には賊なしとなり、所々に逃げ去っていた人々も、様子を見に集まり、土蔵などが残っている者たちは、直ぐ様土蔵住いをいたし、追々小屋掛けの用意をしはじめた。ようやく、人々も安堵の心地になつた。

右、塩ヶ崎の寺に引き取られた降参人は、左の御大名たちに、御預けになられた。

下総国佐倉城主	堀田相模守殿
同国 関宿城主	久世 鎌吉殿
上野国高崎城主	松平右京亮殿

右の御大名へ、二、三百人宛手配し、十一月四日、塩ヶ崎より残らず腰繩にて引き連れ立て、江戸表に送られた。

賊共、降参人の外、五、六百人、黒羽村より芦野村、白坂¹²⁵辺に集まっているとの風聞もあつたので、御加勢の大名、御旗本、十一月四日、五日方より、水戸御出立になり、追いつち御用命を申し付かり、溝口勢も、生瀬村、大子村まで出陣になられたが、さらに敵影も見えざるため、六日、七日、両日お引き返しになられた。

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

- 85 磯前(那珂湊市 旧平磯町)
- 83 宮田村(日立市 旧日立村)
- 81 塩横町(常陸太田市 旧太田町)
- 79 利員村(金砂郷村 旧金砂村)
- 77 中染村(水府村 旧染和田村)
- 75 いぶき橋(常陸太田市)
- 73 中野村(金砂郷村 旧郡戸村)
- 71 松栄村(金砂郷村 旧郡戸村)
- 69 金剛院(常陸太田市 旧幸久村嶋)
- 67 坂下(日立市 旧坂本村 石名坂の下方)
- 65 竹瓦村(東海村 旧石神村 当時久慈川左岸)
- 63 東河内(日立市 旧中里村)
- 61 鱗勝院(那珂町 旧額田南郷 吹上坂西)
- 59 向山村(那珂町 旧神崎村)
- 57 藤山(那珂町 旧額田村額田南郷)
- 55 菅谷村(那珂町 旧菅谷町)
- 53 油繩子村(日立市 旧鮎川村)
- 54 小菅村(里美村 旧賀美村)
- 56 門部村(那珂町 旧木崎村)
- 58 南酒出村(那珂町 旧木崎村)
- 60 吹上坂(那珂町 旧額田村額田南郷)
- 62 上洲(日立市 旧中里村)
- 64 里野宮(常陸太田市 旧佐都村)
- 66 神田村(日立市 旧東小沢村)
- 68 南高野村(日立市 旧坂本村)
- 70 稲木村(常陸太田市 旧佐竹村)
- 72 藤田村(常陸太田市 旧幸久村)
- 74 十二丁田圃(常陸太田市 旧西小沢村岡田)
- 76 小里(里美村 旧小里村)
- 78 小嶋村(金砂郷村 旧郡戸村)
- 80 大門村(常陸太田市 旧菅田村)
- 82 榎林(常陸太田市 旧太田市 日蓮宗久昌寺)
- 84 大貫村(大洗町 旧大貫町)
- 86 小幡宿(茨城町 旧上野合村)

- 19 土木内村(日立市 旧東小沢村)
- 21 田中内村(日立市 旧坂本村)
- 23 下町新町(水戸市 旧水戸市下市)
- 25 小生瀬村(大子町 旧生瀬村)
- 27 助川村(日立市 旧高鈴村)
- 29 大久保村(日立市 旧国分村)
- 31 内堀町(常陸太田市 旧太田町)
- 33 五丁矢場(水戸市 旧水戸市下市)
- 35 下市本町(水戸市 旧水戸市下市)
- 37 中河内村(水戸市 旧青柳村)
- 39 中台村(那珂町 旧五台村)
- 41 奥州二本松(福島県二本松市)
- 43 浄光寺(常陸太田市 旧太田町塙町 時宗)
- 45 石名坂(日立市 旧坂本村)
- 47 入四間村(日立市 旧中里村)
- 49 下孫村(日立市 旧国分村)
- 51 下土木内村(日立市 旧東小沢村)
- 20 神田村(日立市 旧東小沢村)
- 22 嶋村(常陸太田市 旧幸久村)
- 24 大橋宿(日立市 旧坂本村)
- 26 大沼村(日立市 旧国分村)
- 28 金沢村(日立市 旧国分村)
- 30 金井下(常陸太田市 旧太田町)
- 32 中利員村(金砂郷村 旧金郷村)
- 34 細谷(水戸市 旧水戸市下市)
- 36 河岸通り(水戸市 旧水戸市下市)
- 38 木の倉村(那珂町 旧五台村)
- 40 神勢館(水戸市 旧水戸市下市)
- 42 壬生(栃木県壬生町)
- 44 法然寺(常陸太田市 旧太田町東三丁目 浄土宗)
- 46 真弓山(常陸太田市 旧世矢村)
- 48 助川村(日立市 旧助川町)
- 50 久慈舟渡(日立市 旧久慈町)
- 52 河合舟渡(常陸太田市 旧幸久村)

3. 元治元年甲子天狗諸生合戦記聞き書き

- 127 白河(福島県白河市)
 125 白坂(福島県白河市)
 123 月の折峠(月居峠 大子町)
 121 天下野村(水府村 旧天下野村)

- 128 寺門勢(那珂町額田より東北農民により編成された農民隊)
 126 茂木(栃木県茂木町)
 124 芦野(栃木県芦野町)
 122 生瀬村(大子町 旧生瀬村)

(筆者 太田村無名人 大録義行口訳)

- 119 山の寺(常陸太田市 旧佐竹村)
 117 山方村(山方町 旧山方村)
 115 大宮村(大宮町 旧大宮町)
 113 杉村(那珂町 旧神崎村)
 111 足崎村(勝田市 旧前渡村)
 109 和田町(那珂湊市 旧那珂湊町)
 107 馬渡村(勝田市 旧前渡村)
 106 関戸舞の山(那珂湊市 旧那珂湊町)
 103 館山(那珂湊市 旧那珂湊町)
 101 北浜(日立市海岸より東北の海岸)
 99 畑宿(福島県白河郡)
 97 黒羽村(栃木県黒羽町)
 95 坂上村(日立市 旧坂上村)
 93 金沢村(大子町 旧依上村)
 91 西金砂山(水府村 旧金砂村上宮河内)
 89 成沢村(日立市 旧鮎川村)
 87 会瀬村(日立市 旧高鈴村)

- 120 新発田(新潟県新発田市)
 118 大子村(大子町 旧大子町)
 116 野上村(大宮町 旧大宮町)
 114 瓜連村(瓜連町 旧瓜連村)
 112 横堀村(那珂町 旧神崎村)
 110 高野村(勝田市 旧佐野村)
 108 鯉湖勢(東茨城郡鯉湖村中心に編成の農民隊)
 106 柳沢村(勝田市 旧中野村)
 104 反射炉(那珂湊市 旧那珂湊町)
 102 村松村(東海村 旧村松村)
 100 頃藤(大子町 旧上小川村)
 98 伊王野(栃木県黒羽町)
 96 馬場村(常陸太田市 旧蒼田村)
 94 矢見曾山(大子町 旧黒沢村八溝山)
 92 鳥の子山(美和村 旧嶺郷村鷺子)
 90 東金砂山(水府村 旧天下野村)
 88 河原子村(日立市 旧河原子町)